



## ロックで生徒と仲良く!

四方雅之



### 1. 「普通じゃない」音楽の活用法

歌を授業で活用することは、古くから行われています。私も、アラン・ローゼン先生と福田昇八先生の『ロックの心』(大修館書店, 1982)には随分お世話になりました。「発音指導」「文型・文法指導」「文学(詞)の解釈」などがロックを通じてできるのです。英語教師必携の書ですよ。

でも、本日は、「正統派」音楽活用法は、他の先生方にお任せして、私は、ちょっとずるい、普通じゃない方法をご紹介しますと思います。

### 2. 私の曲目リストから——いくつか存じ?

- Yesterday* / The Beatles
- Let It Be* / The Beatles
- Imagine* / John Lennon
- Tears In Heaven* / Eric Clapton
- Hotel California* / Eagles
- Last Christmas* / Wham!
- Cherish* / Kool & The Gang
- People Get Ready* / Rod Stewart & Jeff Beck

どうです? なかなかよい趣味でしょう。ところが、ある日、ショックなことが起きたのです。

### 3. 「先生、古っ! オヤジ臭っ!」

この言葉はショックでした。頭にエクステ(エクステンション。わかります?)をつけた茶髪のダンス部の高校1年の女子生徒です。むっ、としました。しかし、当時40代の半ばにさしかかり、生徒との距離を感じていた私は、偶然にもちょっ

と謙虚な気分だったのです。

「じゃ、君は何がいいと思うの?」

「アヴリルぐらいやりなよ。」

当時は、「なんじゃ、そりゃ?」といった感じです(松田優作のつもりですが、これも古っ! )。アヴリル・ラヴィーン(Avril Lavigne)のことだったんですね。彼女の勧めに従い、*Complicated* をレパートリーに入れてみたのです。(ご存じでない方はYouTubeでご覧になれますよ。)これは受けましたね。特に女子に。感謝したものです。2002年のことでした。

### 4. 「小林克也」健在!

そういえば、新しいものから遠ざかっていたなあ。ちょっと反省です。若さが足りないと生徒は授業についてきません。久しぶりに「新しいもの漁り」を始めようかなあ、と思っていたところ、なんとテレビで『ベストヒットUSA』が復活しているじゃありませんか。感激しましたね。小林克也さんも昔のままです。(癌を克服していたと知り、さらに感激!)ここから得たのが、Kelly Clarkson。アメリカの『スター誕生!』(欽ちゃんが司会で、山口百恵や桜田淳子などが生まれたあの番組。古っ!)のようなテレビ番組から飛び出した、アヴリルの妹分です。*Breakaway* という曲は、野心に満ち溢れた若い女性の気持ちを表現していて、なかなか元気が出る曲です。たとえばサビの部分で、“I’ll spread my wings and I’ll learn how to fly./ I’ll do what it takes till I touch the sky.”と訴えます。近い将来、留学を



して、能力を目一杯伸ばしたいと目論んでいる女子はビッビッと感じるようです。このようにメロディーだけでなく、詞にも関心をよせる生徒も出て来ます。授業では、ビデオ録画しておいた彼女のPV（プロモーション・ビデオ）とインタビューをみせましたが、詞の理解が深い生徒ほど、彼女の一言一句に耳を傾けていました。

## 5. 「小道具」で生徒をゲット

さて、どうやって、生徒に歌わせるか。基本的には教師が乗らないとダメ。教師がその曲に入れ込んでいないと、その曲の良さが生徒に伝わらないのです。もっというならば、大袈裟なぐらい「俺はこの音楽が好きなんだ！」という雰囲気か教師には必要です。

私はずるいですよ。いつも視聴覚室で授業をするのですが、そこにはエレキギターが置いてあります。フェルナンデス社製の「象さんギター（型番：DIGI-ZO HYPER）」です。お笑いの「はなわ」が使っているもの（彼はベースですが）を思い浮かべてください。ギターの本体にスピーカーがついていて、100種類ぐらいの音が出るのです。リズムボックスもついていて、それに合わせて演奏できます。馬鹿うけます。

さらにいいことがあります。ギター大好き少年少女はクラスに必ずいるものです。ケチケチしないで、彼らに愛器を触らせてあげるのです。喜ぶますよ。ついでにギターテクまで教えてくれます。（2004年当時はエレキの初心者でした。）彼らを支援者にして授業を盛り上げてもらうのです。

## 6. 音楽にのめり込む

今年の夏休みは音楽を求める旅にアメリカにかけました。ニュー・オリンズとメンフィスでは、どっぷりとブルースに浸かりました。ニュー・ヨークでは、ロックです。ライブハウスの名門「ニットイング・ファクトリー（Knitting Factory）」のBenzos（写真1）というグループ

は秀逸でした。2学期は彼らの曲を扱おうかなあと思っています。また、彼らのメーリングリストにも入りました。メールを通じて、生徒がメンバーと交流することも可能です。Benzosは、まだ、メジャーデビューしていないので、暇だからです（笑）。帰国後は、文化祭のステージに立つことを希望する生徒たちのオーディションに立ち会いました。もちろん審査員としてです（写真2）。エレキ歴3年。今では学校では、ちょっとした「ギター・ヒーロー」なんですよ（笑）。

今思えば、茶髪の女生徒にちょっと譲歩したのがきっかけでした。生徒の目線に立つことを忘れなければいいのです。それさえあれば、あとは自分の情熱をぶつけることです。そして、なにも新しいものにこだわらず、「いいものはいい！」の精神で「古っ！」っていわれても堂々といきましょう。仲良くなれば、生徒は必ずついてきます。

（しかた まさゆき・成蹊中学高等学校教諭）



写真1 Benzosのメンバーと



写真2 オーディション参加に生徒と